

人権保育専門講座6 〈三重県委託事業〉

じぶん まる！ ～性って誰かに決められるもの？～



セクシュアルマイノリティのこどもたちの居場所づくり

にじいろ i-Ru (アイル)

田中 一步 さん 近藤 孝子 さん

人権保育専門講座6は、にじいろ i-Ru の田中一步さん、近藤孝子さんに「じぶん まる！～性って誰かに決められるもの？～」と題して、松阪、志摩、熊野の3会場でお話いただきました。

ご自身の生き立ちや、葛藤しながら自分自身のセクシュアリティと向き合ってきた経験などをおして、「性」の決めつけによって子どもたちを生きづらくさせてしまう危うさや、「性」は本来多様なものであるということ、私たちのなかにある「あたりまえ」を見つめ直すこと等についてお話しいただきました。

1 はじめに

子どもたちのなかにいろいろな「性」を生きる子どもたちがいます。子どもたちがありのままの自分を生きられる場所をつくっていききたいなと思います。子どもたちの居場所は学校・保育所・保育園・家庭などさまざまです。子どもたちが生きる場所が安心してありのままの自分を出すことができる場所であるために、まずはおとなに「性」は多様なものであるということを知ってほしくて活動しています。



2 友だち紹介

私たちにはたくさんのお友だちがいます。保育園に行っている子、幼稚園に行っている子、小学校に行っている子等さまざまです。そんなお友だちに出会ってほしいなと思います、紹介させていただきます。

※講座・講演などでお二人のともだちに直接出会っていただきたく、ここでは紹介を控えさせていただきます。ぜひ、講座・講演にお越しただいて、お二人のお友だちに直接出会ってください。すてきな出会いがありますよ！！



3 ぼくの生い立ち

① ぼくの父と母

ぼくは1975年に生まれました。父と母は兵庫県のそれぞれ別の被差別部落で生まれ育ちました。ぼくの父と母は部落差別があるために、なかなか仕事がなく、貧しい暮らしをしていました。ぼくの父は6人きょうだいの末っ子です。父以外の5人は誰も学校に行けていません。ぼくが小さい頃、おじちゃんやおばちゃんが家にやってくるのが度々ありました。ぼくは「おじちゃん、おばちゃん何しに来てんの？」と父に聞いたことがありました。父は「おじちゃんとおばちゃんは学校に行っていないから字が書かれへんのやで。だから自分が代わりに書いているんやで」とぼくに教えてくれました。ぼくは小さい頃から部落差別について両親と話をすることがありました。

母は、部落出身ということが高校生になるまで知らずに育っていました。母が知らずに過ごしたのには理由があります。ぼくのばあちゃんは部落出身ということを知らないほうが我が子の幸せだと思って、母には話していませんでした。母は高校生の時、友だちから被差別部落出身ということを知られました。

父と母はいろいろな人との出会いのなかで、部落差別がどういったものか知っていきました。自分たちや、自分が育った地域が悪いのではなくて、部落差別の仕組や差別がおかしいということに気づいていきます。父と母は「部落差別をなくそう」と活動をおこない、その活動をおして出会いました。そして、2人は結婚し、ぼくを含めて3人の子どもが生まれました。

父と母はぼくたちが部落差別に遭ったとしても自分が生まれ育ったところを否定してほしくない、差別に負けない、差別を許さない子になってほしいとの思いでぼくたちを育ててきました。父や母だけでなく、地域の人や学校の先生が父や母と同じ思いでぼくたちにかかわってくれました。だから、ぼくは父や母をはじめ、地域の人に「たくさん愛されているな」と思って育ちました。



② だれにも言えない3つの秘密

そのようなぼくでしたが、だれにも言えない秘密が3つありました。

1つめは、自分は女の子のからだで生まれてきたけど「なんでこの体なんやろう？ぼくは男の子やのに」と思っていたことです。2つめは、両親がつけてくれた名前ではなく、当時はやっていた「キャプテン翼」という漫画から主人公の「つばさ」という名前を自分につけていたことです。そして3つめは、自分は女の子として育てているのに、女の子のことが好きだったことです。



この3つのことは、誰かに「決して言うてはいけない」と言われたわけではありませんでしたが、ぼくには「これは絶対に他人に言うてはいけないことだ」という確信がありました。それは、小学校で受けた授業が大きく関係しています。授業で黒板に示された体の図を見ながら、「男の子は女の子を好きになり、女の子は男の子を好きになる」ということを教わりました。

それは授業だけではありませんでした。日常生活の場面で出合うさまざまな情報は、体のかたちでその人の「性」は決まるというものが大半でした。



しかし、自分はそこには当てはまりません。こうした授業等からも「どう考えても自分はおかしい」と思うようになっていきました。家庭では女の子として、また姉として育てられてきたことによって、「やっぱり自分は変だ。自分みたいな人は、この世に一人しかいないにちがいない」と思っていました。だからこの3つのことは、大好きな父や母、またきょうだいや友だち、そして先生にも絶対に言えないぼくの秘密でした。

③ ぼくの小学校・中学校・高校時代 ～“社会で ぼくが生きていくために…”～

自分がおかしいのではないかというのを感じ始めたのは小学校5年生くらいからでした。ぼくは高学年になると男の子にまちがわれることがありました。自宅からちょっと離れたお店に買い物にいくと「ちょっとぼく・・・」と声をかけられることが多くありました。ぼくは声をかけられてすごく嬉しかったです。

中学校2年生の時、こんなことがありました。それは体育の授業で使う水着販売でのことです。時間割の都合で体操服を着ていたぼくは、友だちと一緒に販売業者のところへ行きました。「2年〇組の田中です。Mサイズください」と言いました。そしたら、当時ボーイッシュな容貌だったぼくに、業者の人が男子用の水着を渡してくれたのです。その時、正直心のなかではめちゃくちゃ嬉しかったのです。でも、ぼくは隣にいた友だちに「ちょっと、これ、どう思う？わたし、女やっちゅうねん」と言ったんです。友だちは手を叩いて「またまちがわれたな、あんた」と言って笑ってくれました。ぼくも一緒に笑っていたんです。本当の気持ちと逆の言葉で友だちに伝えて、自分が「おかしい」と思われないようにしたのです。

さらに、家に帰って同じように「こんなことがあってん。どう思う？」とわざわざ母にも話しました。すると母は、「かわいそうに。あんた女の子やのに」と言いました。ぼくにとって友だちや先生は大事だけど、それ以上に家族は大事な存在で、その家族に否定されることほど辛いことはないと思っていました。



ぼくは、「自分が男の子にまちがわれて嬉しい」という気持ちを少しでも知られないよう

にとそんな行動をとっていたのです。なので、父や母、そしてぼくの周りの人がぼくの気持ちに気づくはずがありませんでした。女の子として育てられてきた自分は、大きくなればなるほど「友だちや親には知られてはいけない」と思い、本当の気持ちに蓋をして生きてきました。



高校生の時、仲のいい女友だちを集めて「あんたって、男の子で誰が好き?」「あの子、カッコいいな」など好きな人の話を自分からしていました。自分の順番が回ってきたら、好きでもない男の子の名前を出していました。嘘をつくことも、好きではない男の子の名前を出して会話を盛り上げることも、ぼくにとって全く難しいことではありませんでした。それがあたりまえでした。

自分のなかで男の子として生きたい自分、女の子として生きていかなければならないと思っている自分のスイッチを切り替えながら生活をするのがぼくの日常でした。ひょっとしたら、友だちのなかには「何で、こんなこと言わせれやなあかんの」と思っていた子がいたのではないかと思います。また、ぼくに名前を挙げられた男の子は、かわいそうやったなと今だから思えます。でも、当時のぼくは自分を守ることで精いっぱいだったので、自分のことしか考えられませんでした。

4 自分が100%でいられる人との出会い

① ぼくが赴任した保育所

ぼくには保育士になりたいという夢があり、保育士をめざすようになりました。その後進学し、保育士となって初めて赴任したのが地域に被差別部落のある保育所でした。その市では被差別部落の在る無しにかかわらず、どの保育所も部落問題について研修を行い、子どもたちの人権を大事にする保育を行っていました。ぼくはそこでたくさんの刺激をもらい、「保育って楽しいな」「保育って難しいな」と両方感じながら仕事をしていました。

そこで出会った先輩保育士からは、子どもの集団づくり、職員の集団づくり、保護者の集団づくりについて教わりました。4月に出会った子どもたちの集団を3月にはどんな集団にしたいのか、計画を立て、とても丁寧に集団づくりに取り組む保育所でした。年間をとおして行事などをおこなう際にいろいろと意見交流をします。その時に、「田中ちゃんは何でそう思うの?」と聞いてくれる保育士がいるんです。ぼくは自分の生い立ちも伝えながら、思いや考えを話していきました。それは被差別部落出身であることを話しても、自分を差別する人はいないと思えていたからです。でも、悩みをもっているセクシュアリティについては、誰にも話せませんでした。

②「ひとりぼっちでしんどかったな」

その保育所に異動してきたのが、横にいるコンちゃん（近藤さん）でした。それまでも研修会などでは顔見知りの仲で、色々な取組を報告し合ってきたのですが、同じ保育所で勤めるのは初めてでした。コンちゃんの保育ですてきだなと思うところは、子どもが見せるどんな姿も受け入れるところでした。



とても印象に残っている出来事があります。コンちゃんが5歳児を受けもっていた時のことでした。力の強さや口調の荒さから、つつい「こわい子」と決めつけられていたYがいました。子どもたちどうしの決めつけにYは悔しさを感じていましたが、子どもたちだけではなく、実はおとなのなかにもYへの決めつけがありました。ある日、ベテランの保育士が園庭に落ちていた棒を拾って歩いているYを見かけます。そしてYに「またそんなもって。なにしてんの！」と怒ったそうです。事務所にいたコンちゃんのところにやってきたYは、「ぼくは何もしてないのに。すごくいややった」と話しました。すごく悔しそうに話すYに、コンちゃんは「何もしてないのにそんな言われたらいややなあ。わたしが一緒に言いに行こか？」と言って、Yと一緒にベテランの保育士のところに話しに行きました。その時のぼくは、「子どもの気もちを、人権を大切にしている保育士になってる！」と思っていました。でも、ぼくは、子どもの気もちより、自分がS先生にどう思われるか。。。ということの方が気になっている自分がいることに気がつきました。ぼくは、そこまで子どもの側に立ちきるコンちゃんの保育をすごいと思いました。そして、同時に、「この人、すてきやな」と思いました。そして、その気もちをコンちゃんに伝えたいと思い、「あなたの保育がすてきやなと思っている」「あなたのような保育士になりたいと思っている」ということを素直に伝えました。

そしてその後、5年生の時から誰にも言えなかったぼくのセクシュアリティについても、自然にコンちゃんに話していました。これまでずっとひとりで考えてきたことを、ただただ聞いてほしいと思い、一生懸命話していました。自分のことを否定されない、排除されないと思える人には、話したいと思えるんやと感じました。

ぼくの話の聞きながら聞いてくれたコンちゃんは、「ひとりぼっちでしんどかったな」と言ってくれました。ぼくはその言葉で初めて自分が“しんどかった”ことに気づきました。5年生の頃からスイッチを切り替えることがあたりまえになっていたのも、しんどいと思えていなかったんです。「ひとりぼっちでしんどかったな」という言葉に、ぼくは涙が止まりませんでした。



③ 好きなパンツがはけ、すきな呼び名で自分のことが言えることの喜び

その後、コンちゃんといろいろ話しました。最後にコンちゃんは「今、いちばんしたいことは何？」とぼくに尋ねてくれました。思いもしなかった問いかけに、ぼくは「男性物のパンツがはきたい」と答えました。たくさんしたいことがあるはずなのに、出た言葉はそれだったんです。そしたらコンちゃんが「明日、パンツ買いに行こう」と言ってくれました。

24歳になって初めて男性物のパンツを買いに行きました。自分がはきたいパンツをはける嬉しい気もちと、ぼくが男性物のパンツを選んでいる姿を他の人が見たら「何か思われるんじゃないか」とドキドキする気もちとがありました。ぼくは緊張していました。

そしたらコンちゃんが「いいねんで。好きなパンツはいたら」と、言ってくれました。そして、好きなパンツをはくことができました。パンツだけではなく、好きな服を着ようと思うようにもなりました。ぼくは、女の子として育てられ、母の喜ぶ顔を見たくて、好きでもないスカートをはいていましたが、我慢せず自分が着たいものを着ようと変わっていきました。



そして、自分の呼び名も変わってきました。人に話をする時、それまでは自分のことを「うち」とか「自分」と言っていたのですが、だんだん「ぼく」とか「おれ」に変わっていきました。ありのままの自分でいられる幸せを感じるようになりました。コンちゃんの前では「嘘をつかなくていい。ありのままの自分でいいんや」と思えるようになりました。

すると、別の問題が起こりました。ありのままの自分を出せる場所がひとつできたことで、逆にありのままの自分でいられない場所が、これまで以上にしんどくなってきたのです。職場や家族の前でこれまでのようにスイッチの切り替えができなくなり、ぼくはしんどくなっていきました。

ちょうどそのころ、テレビで「3年B組金八先生」というドラマが放送されており、「性同一性障害」という言葉を知りました。ドラマの中で生徒が「ぼくは女じゃない、男だ！」と訴えたセリフを聞いて、「ぼくと似てる」と思い、すごく衝撃を受けたのを覚えています。

さらにその何年か後に、女性として登録していた競艇選手が男性として登録し直すというニュースを見ました。ドラマの中での話ではなく現実の話に出会い、「自分はおかしくないのだ」「自分以外にもそういう人はいるのだ」「ひとりぼっちではないのだ」と感じられるようになっていきました。そして、ぼくみたいな人たちのことをもっと知りたい、「性」について知りたいと思い、「性」とは何かを二人で調べる日々が始まりました。

④「セクシュアリティ」って…

私は彼から話を聞いた時、「しんどかったな」の言葉しか出てきませんでした。5年生の子どもが誰にも言えずに一人で抱えて、ばれないように生活していたのはしんどいよなと思って聞いていました。



私は、いろいろな「性」に出会うなかで、「私にとってセクシュアリティって何なのだろう」と考えるようになりました。私は小さい頃から「セクシュアリティ」という言葉を口にすることはありませんでした。「セクシュアリティ」について語ってくれるおとなや友だちもいませんでした。なので、体のかたちでその人の性は決まっていて、異性を好きになるということがあたりまえだと思って私は生きてきました。

「セクシュアリティ」って一人ひとりが、「自分がどう生きていくのか」「だれと生きていくのか」「どんな言葉や格好で自分を表現していくのか」ということにかかわるとても大切なものです。「性は多様である」ことをみなさんと一緒に考えていけたらなと思います。

5. セクシュアリティ(性のあい方)の4つの要素

① 生物学的性:Sex(セックス)

性染色体、外性器・内性器の状態、ホルモンなどの要素によって決められる性。

② 性自認:Gender Identity(ジェンダー・アイデンティティ)

自分自身の性をどのようにとらえているかということ。

私に出会った人は「あっ、女の人やな」と思うでしょう。「あなたは女の人ですか」と聞かれたことはありませんが、そう聞かれたら「はい、女です」と答えます。では「どうして女なんですか」と聞かれたら、どう答えようかなと考えました。「生理があるから・・・でも生理が始まる前も自分を女と思っていたいし」自分が女だと思っていた理由を考えてみても、全てが後付けなんです。いろいろなことを取り除いていくと「私は自分のことを女と思うから女なんや…しか残らないんです。それが性自認だと思っています。」



③性表現:Gender Expression(ジェンダー・エクスプレッション)

身体の性にかかわらず、成長過程・社会生活のなかで後天的に身につけていく性のこと。「男らしさ」や「女らしさ」などの性別役割や、服装やふるまいなどの性別表現など。

以上が自分のなかにある3つの性の要素です。そして4つめの要素として次のものがあります。

④性的指向:Sexual Orientation(セクシュアル・オリエンテーション)

恋愛や性愛の対象となる性別のこと。



「性のありようは多様です」

- ・ 性自認（心の性）や性的指向（好きになる性）は、教育やしつけでは変わらない
- ・ 性別の認識がない人もいる
- ・ ちがいを否定しないこと。どんな性もOK!
- ・ 見ためで勝手に決めない（見ためではわからない）

6 近藤孝子さんから



我慢する人が少なくなるという

私は朝外出して夜帰宅するまで、トイレの心配をすることはほとんどありません。しかし、彼（一歩さん）の場合はちがいました。男性用のトイレに入ることはドキドキするし、かといって女性用のトイレに入ることもできず、結局外出先でトイレに入れずに我慢して家に帰ってくることも以前にはありました。トイレの問題は健康にかかわる重大な問題です。いまでこそ「誰でもトイレ」のような多目的トイレが町に増えてきましたが、今でも「自分の入りたいトイレに入れたい人」「自分が用を足したいときに用を足せない人」はまだまだまだたくさんいると思っています。

わたしたち おとなが…

「わたしがおかしいのかな」と、性について悩みをもつ子どもがいます。また「あなたの育て方が悪かったんや」と周りの人から言われ、悩んでいる保護者がいます。「性が多様であること」をまずはおとなが知り、保育や教育をしていくことが大事だと思います。

すべての子どもたちは、自分が何者であるか迷いながら、探しながら、まちがえながら、自分を確立していきます。私たちおとなは、その迷いや揺れを見守っていくことが大事だと思います。

「わたし」「ぼく」「おれ」など自分の使いたい言葉を使うことができ、したい髪形をして、着たい服を着ている子どもに、おとなが「そーなんやー。そうしたいんやなあ。」と思えるかが大事なのではと思います。

人は「性」に対してあいまいを嫌がる

彼と電車に乗っていると、ヒソヒソと「あの入って、男やと思う？女やと思う？」というやりとりが聞こえてくることがありました。人は自分の中にある「男」か「女」か、どちらかに決めたいのだなと思います。人は「性」に対してあいまいさを嫌がるなと感じます。

わたしたちの「あたりまえ」を見直すことから

保育の現場で貸し出すパンツが一枚しかなかったら？「あなた女の子（男の子）なのに、この男の子用（女の子用）のパンツしかなくてごめんね」と言うのか、「今日は選ぶパンツがなくてごめんね」と言うのか…。私たちはその子の「性」を決めることはできません。これまで「あたりまえ」と思って取り組んできた教育や保育について、性が多様であるという視点からみんなで見直したり点検することが大事ななあとと思っています。

7 田中一步さんから



「大丈夫やで」

出会っている子どもたちのなかには「性」についてしんどい思いをかかえながら生活している子どもたちがいます。その子たちが頑張るのではなく、社会が変わっていかなくあかなんと思っています。

ぼくは、5年生から自分のことを「おかしい」と思ってきました。コンちゃんが「大丈夫やで」と言ってくれたのをきっかけに、それから、時間をかけて友人、きょうだい、家族に伝えていきました。

「わかったでえ」という人は増えていったけれど、「自分はおかしくない」と思えず、悩み続けてきました。それでも「大丈夫やで」という仲間がいて、ぼくは今、ここに生きています。

「ぼくもぼくのことを おかしいと思わなくていいんやあ」

ぼくは外出した時に、じろじろ見られたり、こそこそ言われたりするのがいやで、コンちゃんと手をつなぎたくても出来ませんでした。

ある日、女性どうしがパートナーの友人に出会いました。その二人は手をつないで街中を楽しそうに歩いていたんです。ぼくは「どうして手がつなげるの？」と聞きました。すると「わたしらだって、へんなおばちゃん二人が手をつないで歩いてるってじろじろ見られることあるで。でもな、手をつなぎたいからつないでるだけ。何もおかしくないやん。」とさらっと話しました。その話を聞いて「ホンマに、その通りや。ぼくもぼくのことを おかしいと思わなくていいんやあ」と思いました。

「それが事実」

人のことを好きになることが分からない友だちがいます。その友だちは「人を好きにならないことに理由はない。それが事実」と言います。ぼくは、自分が恋愛対象としてひとを好きになる人で、みんなもそうなんだと思っていました。やっぱり、自分があたりまえで、そうじゃない人に理由を聞く自分があります。恋愛をすることがあたりまえと思っているマジョリティの特権やなあと思っています。

「ふつう」って…

「じぶんをいきるための一冊。」を子どもたちに届けようと学校を訪れてクラスに入って講座をしています。子どもたちにお父さんが二人いる家族やお母さんが二人いる家族のことなど話をすると「ありえへん！！」と言います。「何がおかしいの？」と聞き返すと「だって、家にはお父さんがいてお母さんがいる。それが『ふつう』の家族やろ」と言います。しかし、ある子にとってはお母さんとお母さんがいる家族、それが『ふつう』です。

子どもたちは、自分の家族のあり方が「あたりまえ」と思っているがゆえに、子どもたちの周りにある「性」についての情報はあまりにも偏りすぎています。「性」が多様であるという情報のなかで生きていないために、そのようなことを言うてしまうのです。家族、親戚、自分自身のセクシュアリティと向き合うなかで、子どもたちの『ふつう』は変わっていくと思います。

「知る」ということ

自分のセクシュアリティを「おかしい」と思っているも誰にも言えずにいた友だちがいました。「知らない」ということは自分のセクシュアリティを否定するだけではなく、友だちのセクシュアリティも否定することにもつながります。まずは「知る」ことが大事です。

8 『じぶんをいきるためのるーる。』

最後に、一步さんが「自分を自分らしく生きるために決めているルール」を紹介していただきました。

〔絵本〕「じぶんをいきるためのるーる。」 田中一步:著

一步さんが自分を大切に生きるために決めている6つのルール。“あたりまえ”とされるルールのなかで息苦しい日々をすごしている子どもたちに、「おかしくなんかないよ」「ひとりじゃないよ」と伝えたい。すべての子どもに“じぶん”でいいんだよ」というメッセージを伝えたい。そんな一步さんの思いが込められています。



9 参加者アンケートより

- TVで見ることにはあっても、実際に今まで会うことなくきたなと思っていたが、実は出会っていて苦しい思いをさせていたのかもしれないと今日感じました。保育の言葉掛けのなかでも、何気なく“男の子”“女の子”を使っていたが、もっと考えて言葉掛けをしていかなければいけないと思いました。
- 保育のなかで、子どもたちが「へ～そ～なんや」「こんなもあるや～」と思える瞬間を積み重ねていくこと、おとなが変わっていくことが大事だなと思いました。
- 人はそれぞれちがってあたりまえ、性についてもいろんな性があるとわかっていたつもりでしたが、どこかで自分のものさしでの決めつけがあり、その範囲内だけでの「多様」になっていたと感じました。「どうせ…」と、子どもに思わせない保育士になりたいと思いました。
- 何気ない自分の一言がその子の価値観に大きく影響を与えること、自分のなかに未知のものを排除しようとする気もちがあること、見ているものを自分の狭い価値観で判断しがちであること…意識していきたいと思いました。
- 今回、講座に参加することができて、これからの教育・保育現場での子どもたちへのかかわり方、言葉をととても考えさせられる内容でした。また、家での母親としてももう一度色々と考えてみたいと思いました。
- 誰しもが言いたくても言えないこと、秘密にしたいこと等はあるかと思えます。打ち明けてくれた人に寄り添い、見守り、少しでも力になればと思います。
- しんどい思いをしている人が多いことを改めて感じました。自分の思っていることが言える世の中になるといいのではと思います。保育所という役割をふり返ることができました。
- 自分自身があたりまえだと思っていたことの狭さを感じ、保育としての仕事、人と比べるのではなく、子どもたちが周りのおとなも含め、気もちを楽にもっていきやすい場をつくっていきたいと思いました。

